

メトコナゾールの散布時期とコムギ赤かび病防除効果、  
および穀粒中のマイコトキシン濃度の抑制

○ 暨石秀明<sup>1</sup>、森 勝<sup>1</sup>、三宅泰司<sup>1</sup>、佐久間米子<sup>1</sup>、最勝寺俊英<sup>1</sup>、  
鳥海政一<sup>2</sup> (<sup>1</sup>株クレハ、<sup>2</sup>北興化学工業(株))

【目的】

麦類赤かび病は収穫物の品質、収量に及ぼす影響の他、マイコトキシンによる汚染という観点からも重要な病害である。赤かび病の防除における薬剤散布適期の研究では、病徴の抑制と穀粒中のマイコトキシン濃度の抑制との間には必ずしも相関性はなく、両者に対する薬剤の散布適期は異なるといわれている。そこでメトコナゾール剤の散布時期と回数の違いによる赤かび病の病徴の抑制と穀粒中のマイコトキシン(DON)の関連を調べた。

【方法】

秋播きコムギの圃場に赤かび病菌を接種したトウモロコシ粒を散粒して発病を促した。開花期 4 日後から 31 日後までメトコナゾールの散布時期を変えて 1 回散布区と 2 回散布区を設け、赤かび病防除効果と収穫穀粒中のマイコトキシン(DON)濃度を調べた。

【結果および考察】

1 回散布区では開花期 4 日後の散布時期が最も発病が少なく、それ以降の散布になるにつれて発病度、発病穂率とも増加する傾向にあった。開花 4 日後とその後の計 2 回の散布区ではいずれの散布時期の場合も赤かび病防除効果はほぼ同等であった。穀粒中の DON 濃度は 1 回散布区、2 回散布区とも開花期 4 日後から 17 日後の散布にかけて減少する傾向が見られたが、開花期 25 日以降では急激に増加した。これらのことから、赤かび病の病徴を抑制するのに最適なメトコナゾールの散布時期と、穀粒中の DON 濃度を抑制する最適散布時期は異なり、病徴の抑制には開花期 4 日後(開花盛期)頃の散布が、DON の抑制には開花期 17 日後(乳熟期)頃の散布が最適であることが推察された。

**Relationship between efficacy against Fusarium head blight of wheat and concentration of mycotoxins in wheat grains in different spray timing of metconazole**

Hideaki Tateishi<sup>1</sup>, Masaru Mori<sup>1</sup>, Taiji Miyake<sup>1</sup>, Yoneko Sakuma<sup>1</sup>,  
Toshihide Saishoji<sup>1</sup> and Masakazu Toriumi<sup>2</sup> (<sup>1</sup>Kureha Corporation, <sup>2</sup>Hokko  
Chemical Industry)